

モノ作りの現場から柔軟な力が消える?

神戸製鋼の検査データ改ざんのニュースをウェブで見ていたら、「自分が正しいと思うことができない。正しいと信じる道をまっすぐに歩めない。(今回)の事件は)そんな日本社会の犠牲である」というコメントがあった。「日本社会」は昔からそうだったのか、あるいは最近になってとみに強化されている傾向なのだろうか。

現場の知恵と発言力

今回の神戸製鋼のデータ改ざんは10月8日に同社が記者会見して明るみに出た。最初はアルミや銅製品部門のみが対象とされたが、その後、鉄粉製品、金属材料、さらには主力の鉄鋼製品にまで広がり、製品の納入先は海外も含め500社以上に及ぶという。

同社の製品は製造メーカーなどに納入する材料や部品がほとんどだが、完成品が顧客企業の決めた仕様内に収まっているかどうかを検査する際にデータ改ざんが行われた(検査データをいつたん手書きした後、それをパソコンに入力する際に、仕様に収まるように書き換えたらしい)。製品の品質を最終審査し、場合によつては出荷を止める立場である品質管理の担当者も黙認していたとも、10年以前からデータ改ざんが行われていたのに取締役会が黙認していたとも言つた例もある。

いろんな事情があるだろう。製品の仕様は各企業が依頼してくるもので基準はまちまちである。自動車会社は、神戸製鋼から納入したアルミ板を使って生産した車に安全上の実害はなかつたと発表している。少しぐらい基準から逸脱しても問題ないという意識があつたのかもしない。また、検査順守の掛け声もそれほど厳としたものではなく、上意下達の過程で希釈化され、「実害がない範囲なら改ざんも許される」、「納期を守るためにはやむを得ない」、「上層部も承知しているはずだ」といった空気が職場に蔓延していた疑いもある。

これまで生産から納入までの過程が工場ごとの縦割りだったのを、水平的な品質管理体制を敷いて点検したことと、表面化した(ウミが出た)面もあるようだ。不正発覚後の調査に対して、管理職を含む従業員が不正を報告しないよう隠蔽工

作の可能性もあるといつ。モノ作りの現場が崩壊の危機に瀕しているようだが、かつての現場には、裁量やつていく「現場の力」があった。それなりの知恵と、それに基づく発言力もあつたはずである。その伝統的なモノ作りの現場が誇りを持続できなくなり、淀んだ空気がたまつてことこそが問題だつ。

繰り返される企業不祥事

日本自動車で無資格者が新車検査をしていた例も構造が似ている。こちらは国土交通省の立ち入り検査で9月に問題が発覚したが、その後も一部工場で無資格者による検査が続いていた。同社は10月19日、国内全6工場で生産している国内向け販売車両の出荷停止を決めた。

会社側の説明によると、工場長や部課長などの管理職から、現場をまとめる係長への指示がうまく伝わらなかつたといふ。守らなかつた現場が悪いとも受け取れる説明だが、現場から見れば、有資格者の数が少なく「効率よく仕事をしようとすると無資格者を使いたくなる」事情もあつたらしい。

このところの企業不祥事には、2014年以降だけでも、タカタ(エアバッグ)なども見つかり、JIS法規違反

現代社会に潜むデジタルの「影」を追う

市民のための「サイバーリテラシー」

矢野 直明 サイバーリテラシー研究所 代表

No.142 神戸製鋼のデータ改ざん

やの・なおあき / 1966年朝日新聞社入社。79年出版局『アサヒグラフ』編集部員。88年『ASAHIパソコン』初代編集長。『月刊 Asahi』編集長の後、95年から出版局デジタル出版部長兼『DOORS』編集長。97年総合研究センター主任研究員。2002年朝日新聞社退社。同時にサイバーリテラシー研究所を開設。03年4月から06年3月まで明治大学法学院客員教授。06年4月から情報セキュリティ大学院客員教授。07年4月から12年3月までサイバー大学IT総合学部教授。著書に『インターネット術語集』(岩波新書)、『サイバーリテラシー概論』(知泉書館)、『総メディア社会とジャーナリズム 新聞・出版・放送・通信・インターネット』(知泉書館、2009年度大川出版賞受賞)など。最新刊『IT社会事件簿』(ディスクヴァー・トゥエンティワン)では、ITの進化により引き起こされたさまざまな事件事故の真相に迫っている。

ウェブ「サイバー燈台」 本連載「現代社会に潜むデジタルの『影』を追う」をめぐる意見交換が目玉です。読者のみなさんもぜひご参加ください。 右画面

プロジェクト欄がオープン サイバー燈台の「専門店街」「プロジェクト」欄では、「映画史に見るサイバーリテラシー」「サイバー絵本」などのオリジナル・コンテンツのほか、「客員コナー」として有識者の知見を紹介。【New】



サイバー燈台

<http://cyber-literacy.com/>

製造ミス)、東洋ゴム工業(免震ゴムの性能データ偽装)、旭化成(杭打ち工事のデータ偽装)、三菱自動車(軽自動車の燃費データ改さん)、スズキ(燃費データの不正測定)などがある。

なぜこのような手抜き作業が次々に発覚するのだろうか。神戸製鋼の今回のデータ改さんは「氷山の一角」で、徹底的に検査すればもっと広がるとも言っているが、神戸製鋼そのものが現在日本のモノ作り企業に蔓延する病根の「氷山の一角」だと考えたほうがいいだろう。

「等身大精神」の危機

私は『サイバーリテラシー概論』(2007年刊行)の中で、当時の東京証券取引所をめぐる、みずほ証券の株誤発注事件にふれて、ちょっととした不注意で、という間に400億円もの損害を与えてしまった時代にあっては、「会社に与えた損害は自分で弁償する」という責任の取扱方はあり得ず、そういう事情がまともな生き方を守るという「等身大の精神」を失わせていると書いた。

「等身大の精神」というのは、エコロジーの世界で見直されていた「等身大の技術」を援用した造語だが、言いたいことはこうである。ITの飛躍的発達が信じられない規模の犯罪を可能にし、それがまともな生き方を反故にしてしまったために、人びとは頭の中でシャボン玉がボンと割れるような失望を抱く。はつきりとは意識されないが、こういうかすかな

失望感が続くと、人びとはまともに生きる熱意を失つてしまいがちである。深くものごとを考えることをやめ、その場その場で流されていく。

もともと日本人に「長いものには巻かれろ」的な事大主義的傾向が強かつたのは確かだが、ここへきて、この傾向に拍車がかかっているように思われる。冒頭に掲げたコメントには、無責任とも無気力とも言える現場に身を置きながら、どこかで「こんなことではダメなんだよな」と自問自答しているような、切実でしかも物悲しい響きがある。



考えません！課されるまでは！

イラスト kkkkkkkkkkkkeeeeiiiiii